「心の癒し」につながる本の紹介についての一考察

―ビブリオセラピーに用いた本を使った実践―

企画調査課 主任指導主事　笹倉　　剛

要　旨

近年、子どもたち同士の人間関係が希薄になるとともに、ストレスや精神的な悩みを抱える子どもたちが多く見られるようになってきた。このような子どもたちの心を癒すものの一つとして本がある。古くから、本には精神的な病や疲れを癒す潜在的な力があるとされてきた。本を用いて心を癒す実践は、最近、ビブリオセラピーという療法で、専門家たちによって行われるようになってきている。本研究では、ビブリオセラピーに用いた本の紹介技法について探っていくとともに、専門家がビブリオセラピーに用いた本が心の癒しにつながる本であるかどうかを、子どもたちの感想文をもとに分析し検証した。

キーワード　ビブリオセラピー　読書療法　ブックセラピー　「心の癒し」につながる本　リラクゼーション

はじめに

児童生徒の読書離れ・活字離れが叫ばれて久しいが、その解決の具体的な糸口は見つかっていないのが現状である。平成10年の学校図書館法の改正により、平成15年4月から一定規模以上の学校に司書教諭を置くことが義務づけられた。本の専門家である司書教諭が各学校に配置されることは、児童生徒の読書意欲の向上と豊かな人間性を培う上で、大変効果があると考えられる。このような人的な整備に加えて、学校図書館の蔵書数の拡大や学校図書館の整備など、物的な環境整備も重要となってくる。さらに、読書活動の運営面においても、学校図書館の運営や読書活動の推進に向けた具体的な取組や実践が求められている。

近年、子どもたちを取り巻く環境は急激に変化し、不登校やいじめ、学級崩壊、非行などの問題に象徴されるような心の教育に関わる問題も生起している。このような状況で、子どもたち自身が悩みをもっていたり心の問題に悩んだりしているケースも少なくない。

昔から、将来の生き方のモデルを見いだすという観点から、読書は大きな意義をもたらすものであると言われてきた。最近、欧米では、スクールカウンセラー、教師、ソーシャルワーカー、看護婦といった専門職に携わる人々が、ビブリオセラピーという、本で人々の心を癒す読書療法に注目し始めている。学校においても、このような専門家達がビブリオセラピーに用いた本の潜在的な力を生かして、子どもたちの豊かな心を育む読書活動を推進していくべきである。

本来、読書は個人的なものであり、一人一人の能力や興味・関心によって、その指導方法も異なってくる。そのため、個々の子どもたちの特性を把握し、「子ども自身が読みたい本」や「その子どもに読ませたい本」の選書の工夫が必要となってくるだけに、司書教諭をはじめ、教師の役割やリーダーシップが大切になってくる。つまり、子どもたちが自分の興味・関心に応じて自由に読む読書、課題に応じて読む読書、子どもの抱えている精神的な悩みやストレスなどに応じて読む読書、このような読書指導が、今後、必要になってくるように考えられる。

1　ビブリオセラピーとブックセラピーについて

(1)　ビブリオセラピーの定義

ビブリオセラピー（Bibliotherapy）という用語は、1916年、雑誌 Atlantic Monthly の記事の中で、Samuel M.Crothersが初めて用いたとされている。[1] いろいろな文献の中にビブリオセラピーについての様々な定義が見られるが、概ね「本を使って人々の心の問題を解決する方法」としている。また、図書館用語辞典では、ビブリオセラピー（読書療法）を次のように定義づけている。[2]

「読書が人間の行動に影響を与え得るという前提に立って、パーソナリティや行動などにおいて精神的な問題を持った人の治療に読書の治療効果を活用すること。」

このような定義から、学校の中でビブリオセラピーを行うには、専門家の指導や協力なしでは難しいことがうかがえる。

(2)　ビブリオセラピーの歴史

人類は、書物が人の心の慰めや癒しの働きを持つことに気づいていた。そのことは、古代ギリシャの都市のテーベにある図書館の入り口に、「魂の治療所（心の薬局）」という銘刻が掲げられていたことからもわかる。このように人々の心の問題を解決するために本が用いられたのは、大変古い時代からである。

読書が心理療法的な手段（ビブリオセラピー）とし

て認められるようになったのは、1900年代に入ってからである。それ以後、公共的な施設や病院において、症状が重く長期にわたる障害のある患者に対して、精神的なやすらぎを与えるための心理療法的な治療として行われてきた。

日本では、読書療法臨床実践の草分けとして大神貞夫が知られている。彼は1960年当時、「同一視」「情動触発」「創造的洞察」という3つの読みのプロセスを経て、治療に至るとしながらも、「読書による性格治療」ということばを用いていることからも明らかなように、子どもの本の内側にひそむ「ものがたりの力」を重要視してきた。[3)]

1998年、村中李衣が病院や学校等で、お互いが「読み聞かせ」をするという（「読みあい」）ビブリオセラピーの実践を、『読書療法から読みあいへ』（教育出版）にまとめている。

(3) ブックセラピー

最近、出版関係者の間では、「ブックセラピー」という言葉が広まりつつある。ビブリオセラピーでは専門家が診断して本を処方するのに対して、ブックセラピーは一般市民が大衆薬（本）を自分で自分に処方する自己治療を意味する和製英語である。

本研究では、学校における本の紹介の実践を念頭においているので、専門家の実践をもとにしたビブリオセラピーの要素を取り入れながら、ブックセラピー的な本の紹介を行っていくことがねらいである。

人は体調が悪いときや、ちょっとした切り傷や擦り傷では病院に行かない。軽いけがなどの場合は簡単な応急処置で済ませることが多い。人体には自然治癒力が備わっているので、手当てをすれば元にもどることが多い。実は心の問題も同じように考えられる。学校で、友人関係でのトラブル、受験の失敗、将来への不安、家庭問題などで悩む人が、できるなら一人で解決したいと思ったとき、あるいは他人に相談したいのだが、そうすれば他人に自分の心の中を覗き込まれてプライバシーが侵害されてしまう。こんなとき一人で問題を解決する方法として、もっともそれにふさわしい本がある。そのような本の情報をブックリスト等を使って子どもたちに伝えるとともに、そのような本を選書し、子どもたちに薦められたら、子どもたちの人間形成の上でも、心を癒すという点でも価値あるものと考えられる。

(4) ビブリオセラピーの先行調査から

ビブリオセラピー（読書療法）についての先行的な研究として、毛利美都代の調査研究が挙げられる。その調査では、「日本での読書療法の知名度」「仕事上で、どんな時に、どのような本を用いているか」「仕事上で、どのように読書療法と関わっているか」の3点について調査している。

この研究での調査対象者は、公立図書館・学校図書館の司書（79名）、カウンセラー（44名）、小・中・高等学校教師（55名）の計178名である。その調査結果の一部を紹介する。

① 読んでほしい本はあるか

調査項目の中で、「いじめ」に苦しんでいる子どもに接したとき、そのような子どもたちに読んでほしい本はあるかを調査している。

（表1）[4)]

質問: いじめに苦しんでいる子ども達に対してぜひ読んでほしいと思う本がありますか。					
回答					
人数（Row%）					
	ある	ない	すぐには思いつかない	その他	全体
司書	22(27.8)	5(6.3)	47(59.5)	5(6.3)	79(100)
カウンセラー	11(28.2)	1(2.6)	22(56.4)	5(12.8)	39(100)
教師	18(34.0)	1(1.9)	32(60.4)	2(3.8)	53(100)

欠損値＝7

表1では、カウンセラー、司書、教師のそれぞれ3割程度の人が「ある」と回答している。回答者の意見の中には、「実際にその状況になってみないとわからない。」「個々の子どもたちのケースにより、いじめられている子には、この本、といったマニュアル的な考えは危険だと思う。」「本の好みには個人差があるため、特定の本をあげるのはとても難しい。」があった。

本を与えることで、すべてが解決するということにはならないが、心理的な不安をやわらげたり、ストレスを軽減するのに役立てばいいのではないだろうか、と述べている。

この質問の回答に見られるように、子どもの抱えている問題や症状について本を与える場合は、特に慎重に対処しなければいけない。学校では、読書療法そのものを実践する場ではないので、そのことを踏まえて子どもたちの読書指導を行わなければいけない。

② 子どもの心の問題に対して本は有効か

（表２）[5)]

質問:	本は、子どもの心の問題に対して何らかの有効な手段になると思いますか。					
	とても有効な手段になると思う	ある程度は有効な手段であると思う	ほとんど効果な無いと思う	かえって悪い結果になると思う	その他	全体
司書（人数） （Row%）	12 15.2	56 70.9	6 7.6	0 0.0	5 6.3	79 100
カウンセラー（人数） （Row%）	2 4.5	32 72.7	0 0.0	0 0.0	10 22.7	44 100
教　師（人数） （Row%）	8 14.5	41 74.5	0 0.0	0 0.0	6 10.9	55 100
全　体（人数） （Row%）	22 12.4	129 72.5	6 3.4	0 0.0	21 11.8	178 100

表２は、読書療法に対する印象や意見を専門職のグループ別に示したものである。「とても有効な手段になると思う」「ある程度は有効な手段であると思う」を合わせると、司書、カウンセラー、教師の８～９割が、ある程度有効であると回答している。

毛利美都代の調査研究からわかるように、司書、カウンセラー、教師のほとんどが、子どもの心の問題に対して、本が有効な手段になりうるということを認めている。

３　本の紹介について

(1)　従来の本の紹介方法

ビブリオセラピーで用いられた本を子どもたちに紹介する方法として、次のような本の紹介方法が考えられる。それは、「読み聞かせ」「ブックトーク」「ストリーテリング」「ブックリスト」「展示」等の紹介方法である。

① 「読み聞かせ」

絵本などの本を見せながら、全文を読んで聞かせる方法である。幼児から小学校低学年にかけての「読み聞かせ」は、子どもが本来持っている知的好奇心を引き出し、将来にわたって本を友とする習慣づけをする第一歩として欠かせないものとされている。

最近では、図書館や家庭だけけでなく、幼稚園・小学校・中学校などでも「読み聞かせ」の実践が行われるようになってきている。

② 「ブックトーク」

あらかじめ読んでおいた数冊の本を、あるテーマに基づいて紹介し、参加者にそれらの本について読書意欲を起こさせることを目的とする。特に、読書の領域を拡大し、新しい分野に興味と関心を呼び起こす読書の動機付けとして効果がある。

③ 「ストリーテリング」

物語を覚えて子どもたちに語る活動である。文字が読めない子どもでも物語を楽しむことができるので、図書館や学校などで読書への導入の手段として実施されている。ただ、物語を覚えるという時間的な制約があるため、だれにでもすぐできるというものではない。

④ 「ブックリスト」

児童生徒の興味ある本のリストをまとめ、紹介する方法である。その種類としては、行事や季節に応じたリスト、推薦図書としてのリスト、新刊図書のリスト、必読図書のリストなどがある。このような図書リストを効果的に活用すれば、児童生徒の読書意欲を刺激する上で貴重な資料となる。

⑤ 展示

図書室などに本を配架するときに、一か所に集めて本の表紙を見やすく展示する方法である。その方法としては、新刊書、テーマ別、課題別などの展示が考えられる。特に、新刊書の展示は、子どもたちの興味・関心がかなり高い。

(2)　本の紹介技法のよさや問題点

次に、それぞれの本の紹介技法についての問題点やよさをまとめると次のようになる。

	問　題　点	よ　　さ
読み聞かせ	・一度に複数の本を紹介できない。 ・一冊の本を紹介するのに時間がかかる（特に、活字の多い本については）。	・本をはじめから終わりまで読んでもらえるから、本の内容がよくわかる。 ・読み手が工夫して読んでいるから、本の楽しさが伝わりやすい。
ブックトーク	・ブックトークのシナリオをつくるのがむずかしい。 ・選書に時間がかかるのと、かなり子どもの本に精通しておかなければできない。	・テーマに応じた学習を行うには最適である。 ・テーマに応じた学習が深まっていく。 ・個人差に応じた本の紹介ができる。
ストリーテリング	・一つの物語を覚えるのに時間がかかる。 ・ストリーテリングの専門的な知識や技術が必要である。	・物語を覚えてじっくり聞かせることができるから、深い感動を味わわせることができる。 ・子どもたちの聞く力が育つ。

ブックリスト	・読書の好きな子どもはよく読むが、きらいな子どもは読まない。 ・本を直接に紹介する方法ではないので、本のよさが伝わりにくい。 ・ブックリストを作成するには時間がかかる。	・紹介のねらいに応じた特集ができる。 ・本の幅広い情報を得ることができる。 ・行事や季節、発達段階に応じたタイムリーな本の紹介ができる。 ・ブックリストは追加したり修正が容易である
展示	・ねらいに応じた展示をするには、企画する教師の意欲と努力が必要である。 ・場所が図書室などに限定される。	・展示では直接、本を手にとって見ることができる。 ・本棚に配架された本より、本が読まれやすい。

「読み聞かせ」で本をじっくり聞かせるということが、「心の癒し」などの点では効果があると考えられるが、ストリーテリングのように一つの物語を静かに語り聞かせるというのは、さらに奥深い感動が得られると考えられる。

(3) 「心の癒し」につながる本の紹介

① 子どものことばによる本の紹介

子どもたちに、「心の癒し」に関する本をどのように紹介していけばよいのだろうか。そのためには、元になる「心の癒し」に関する文献リストが必要になってくる。その意味では、『心を育てる絵本のリスト』(高文堂)や『読書療法から読みあいへ』などの本が参考になる。

本を紹介する時には、「読み聞かせ」「ストリーテリング」のように本の内容を直接的に語って聞かせる方法もあるが、「ブックトーク」「ブックリスト」「展示」などについては、「子どもの目線」「子どものことば」で紹介するようにすれば、本に対する興味・関心を、より子どもたちに持たせることができる。しかし、一般的に多くの本の解題や書評は、大人が読むということを前提に書かれていることが多く、本の紹介に適したブックリストが少ないのが現状である。子どもに本を紹介するには、読書意欲を刺激するという点でも、子どものことばで語りかけたり書いたりするのがもっとも適している。

そういう意味で、唯一『どの本よもうかな？』(国土社)は、小学校の低・中・高学年版が出版されており、それぞれ子どものことばで本の紹介がされているので、「読み聞かせ」「ブックトーク」「ブックリスト」「展示」などに活用できると考えられる。

このような本のリストは、教師が子どもたちに「ブックトーク」のような本の紹介だけでなく、子どもが自分で好きな本を選ぶときの資料として活用できる。各学校でも、子どものことばで本が紹介できるようなブックリストを作成しておくと、大変役立つと思われる。できれば一枚ずつのカードに記入し、子どもたちが自由に閲覧できることが望ましい。展示などでは、このようなカードを本に添えておくなどの工夫も考えられる。

(資料1)『どの本読もうかな？』(高学年)[6]

ゴリラはごりら

くどうなおこ　詩
あべ弘士　絵
童話屋
112ページ
本体1.250円

この本は、作者の工藤さんが、動物園のはらぺこワニに食べられそうになったとき、ゴリラのごんたが、「こら、やめなさい」と、さけんで助けてくれたことからできたそうです。

読んでいくうちに、自分もおりの中のゴリラになったような気がしたり、森の動物たちのことを夢見たり、なつかしがったりするような、ふしぎな気分になってきます。

たのしい絵をそえて、すばらしい絵本になっていますが、絵をかかれた、あべさんは、動物園の飼育係をやめ、「どうぶつ」になったといっているように、ゴリラの絵にも友だちとしての感情が流れているような気がします。

工藤さんとあべさんにとって、ゴリラは動物というより、自分の家族か友だちとしての「ごりら」なのです。

この本を読んだら、動物園のゴリラに語りかけてみたくなるのではないでしょうか。それほどゴリラが身近に感じられる、たのしい絵本です。

② 分類別の本の紹介

村中李衣は、『読書療法から読みあいへ』の中で、本という「ものがたりの力」をかりて、人と人の関わりの場をよみがえらせる試みを行っている。それが「読みあい」というビブリオセラピーである。今まで、病院や学校等でビブリオセラピーに用いてきた絵本を分類別に紹介している。本書では、「心の癒し」に関する絵本を内容別に分類し、紹介している(一部抜粋)。[7]

ア　五感を広げる、詩的空間、ことばの流れ、絵の流れ
・『雑草のくらし―あき地の五年間―』(福音館書店)
・『アンジュール』(ブックローン)
・『だくちるだくちる』(福音館書店)　ほか
イ　ものがたりの力、かたりの力にふれる
・『へっこきあねさがよめにきて』(ポプラ社)
・『じゃがいもかあさん』(偕成社)
・『ほら いしころがおっこちたよ　ね、わすれようよ』(偕成社)　ほか
ウ　リラクゼーション、無意識下の世界へ降りて行く
・『ルラルさんのにわ』(ほるぷ出版)
・『はろるどとむらさきのくれよん』(文化出版局)
・『せんたくかあちゃん』(福音館出版)　ほか
エ　家族の孤独(心)、ひとりずつの孤独(心)をのぞく、「日常」の意味
・『ふわふわくんとアルフレッド』(岩波書店)
・『もりのなか』(福音館書店)
・『またもりへ』(福音館書店)　ほか
オ　問題の本質、葛藤のさま、克服の手がかりをつかむ勇気、愛するということ
・『にんじんケーキ』(評論社)
・『ちいさなジルはどこへいったの』(偕成社)
・『かあさんのいす』(あかね書房)　ほか
カ　デザイン、ことばのリズム、絵のリズム、音楽

・『ちからたろう』(ポプラ社)
・『うみのがくたい』(福音館書店)
・『おちゃのじかんにきたとら』(童話館)　ほか
キ　画面の力、エネルギー、生命力
・『かもさんのおとおり』(福音館書店)
・『どろんこハリー』(福音館書店)
・『ピーターのいす』(偕成社)　ほか
ク　デザイン、ことばのリズム、絵のリズム、音楽
・『もこ もこもこ』(文研出版)
・『もけらもけら』(福音館書店)
・『ころ ころころ』(福音館書店)　ほか
ケ　愛らしさ、幼いものを愛しむ、生活をよびおこす
・『おにぎり』(福音館書店)
・『にんじんとごぼうとだいこん』(すずき出版)
・『だっこして』(こぐま社)　ほか
……

このように本を分類しておくと、子どもの状態やクラスの実態に応じた本の紹介ができるし、ある程度ねらいに応じた本の紹介が可能になる。特に、村中李衣は、一定期間、「読みあい」というお互いに読みあう活動を通して、次のようなことが確立できると述べている。[8)]

・読みあいの「場」の中でのリラクゼーションをはかる。
・読みあいの場を通して、「他者」との信頼関係を結べる。「自分」に気づいてもらう……関係性回復の糸口を自分で見つけてもらう。
・相手がその生活の中で、ほんとうに求めているものが何なのかを、読みあいの中でのものがたりへの共感体験、それに、読んでいる最中や、読み終わったあとの、ことば、しぐさ、ことばやしぐさをこえた共感感覚の中から、見つけ出していく。

以上のような内容を「読みあい」のよさとして挙げているが、カウンセラーのような臨床心理的な専門性がない教師でも、①や②のレベルまでは、実践できるのではないかと考える。③のようなことばやしぐさの分析になってくると、かなり治療的な要素が高いので、専門家からの助言や指導が必要である。

以前、小学校3年生の学級担任から、自閉症の傾向のある子ども（女子）の事例を聞いたことがある。ほとんど友だちや教師に話ができない子どもであった。教師が学級で毎日「読み聞かせ」を行っていると、家から自分の好きな本を持ってきて、最初のうちはその本を読んで聞かせていたが、教師とその子がお互いに読みあうようになってきた。それから、教師に少しずつことばを発するようになり、3学期頃には、先生や友だちにも話ができるようになった。まさに、村中李衣が行った「読みあい」の効果であったのではないかと考えられる。このような事例の効果については、今後、実践される中で、より明らかになってくるであろう。

(4)　「心の癒し」につながる本の紹介の場

学級では、「心の癒し」につながるような本を、特別活動（学級活動など）の時間や、「朝の会」「帰りの会」などの短い時間を利用して紹介することもできる。紹介の方法としては、先ほど述べた「読み聞かせ」や「ブックトーク」などを用いることにより、子どもたちの読書意欲を刺激したり、リラクゼーションをはかったりすることができる。さらに、子どもたちが読んでほっとするような本を、校内の読書郵便（子どもから子どもへの本の推薦の手紙）を用いることも効果的である。

学校図書館では、定期的に主題別に「心の癒し」につながる本を展示したり「ブックリスト」にまとめたりして、子どもたちに紹介することも大切である。

また保健室で、不登校の子どもや、体の調子の悪い子どもに絵本を読み聞かせている養護教諭の事例もあるが、これも子どもとの信頼関係を結んだり、リラクゼーションをはかったりする上で効果がある。

4　「読み聞かせ」による作品『あな』の分析

「心の癒し」に関する本として、『あな』(谷川俊太郎、福音館書店）という絵本を用いて、小学校2年、小学校6年、中学校3年のそれぞれのクラスで「読み聞かせ」を実践してもらった。「読み聞かせ」の後、感想文を書いてもらい、その分析を行った。この『あな』という作品のあらすじは、だいたい次のような内容である。

ある日、ひろしは何もすることがなかったので、地面にあなを掘りはじめた。けれど、家族や友人はなぜあなを掘るのかと聞いてきたが、ひろしはひたすらあなを掘りつづけた。ただ、おとうさんだけは、ひろしをはげましてくれた。手にまめをつくりながらあなを掘っている途中に、ひろしは芋虫に出会い、あいさつをする。自分が掘ったあなで、ひろしはずっとすわりつづけた。また、友人や家族がどうしてそんなところにすわっているのかと問いただす。空に一匹の白い蝶が飛んでいくのを、あなの中からひろしは見上げる。そしてあなの中から、見る空はいつもより高く思えた。あなから出てきたひろしは、自分が掘ったあなを埋めてしまった。

以下、子どもの感想文を項目ごとに要約し、考察をすすめたい。ただし（　）内は人数を表し、複数回答で集約をしている。

(1) 小・中学生の感想文の分析

① 小学校2年生の感想（30名）

ひろしの行動に疑問をいだいた意見

- なぜ、ひろしくんは深いあなをほったんだろう（5）
- どうしてあなをうめたのか（4）
- ひろしくんはどうしてあなの中にすわったのか（2）

ひろしの行動をほめた意見

- あんな深いあなを掘って、ひろしくんはすごい（5）
- だれが止めてもあなをほりつづけた、えらい（4）
- 自分だけのひみつの場所だからいいのかな（3）
- あなをもとにもどしたのがすごい

作品そのもののよさに気づいた意見

- いも虫に「こんにちは」と言ったのがおもしろい（2）
- いも虫やちょうちょが出てきたのがおもしろい
- 堀り続けていたときのひろしの受け応えがおもしろい

自分に照らし合わせて考えた意見

- 自分もあんな楽しいことをしてみたい（2）
- 自分だったらあんな深いあなから出てこれない
- ぼくにもあんな深いあなの堀りかたをおしえてほしい

ひろし自身の立場に立った意見

- おとうさんに「いいあなだね」と言ってもらってうれしかった（2）
- あなはひろしくんが掘ったからひろしくんの「あな」だ
- あなの中はしずかでいいね
- あなの中にすわって気持ちよかったのだね

『あな』を読んだ感想の中には、ひろしがどうしてあなを掘り、またそれを埋めてしまったのかという疑問が多かった。特に、あなが深かったので、そのように感じたのではないだろうか。なぜそうしたのかと感じるのは、どこかで自分の過去の体験と比べている部分がある。子どもたちはわからないなりにも、ひろしがあなを掘りたかったのだということは認めているように思われる。

個々の子どもによって感じ方は様々であるが、ひろし自身の気持ちになって考えたり、自分だったらどうだろうと考えながら、作品のおもしろさを楽しんでいたという先生の話をうかがった。この作品は何かよくわからない部分があっても、ひろし自身が満足できるようなことがしたかったのだ、ということは感じている。次は、その代表的な子どもの感想である。

> 「ひろしくんは、なんでひろしくんのあなをほったのか、だれにもわからない。なんで、自分のあなをうめたのかわからない。わたしはもっとふしぎなことがある。この本をつくった人は、なんでなぞばかりの本をつくったのか、わたしはわかった。それは、自分でかんがえること。」（Rさん）

この感想を読み、小学校2年生でもこれだけ作品を深く読んでいるのかと驚かされた。この子が感じているように、その子どもなりに作品を自由に楽しむことがもっとも大切なことである。

以上の感想から、小学校2年生でも作品を素朴に読みとり、「ひろしがあなを掘ったということ」や「あなをどうして埋めてしまったのか」ということに疑問をいだきながらも、作品から受ける楽しさやよさを味わっている子どもたちが多くいるということがわかった。

② 小学校6年生の感想（35名）

ひろしの行動に疑問をいだいた意見

- なぜ、あなをほったのかわからない（14）
- 最後にどうして掘ったあなをうめたのか（7）
- いも虫が通れないから（いも虫のために）あなを埋めたのかな（3）
- なぜ、いも虫にあいさつしたのか
- ひとに聞かれても、何のために掘るのかをなぜ言わなかったか
- なぜ、あなの中にすわりこんだのか
- なぜ、お父さんだけがほめているのか
- いやなことがあって、あなを埋めたんだろうか

ひろしの行動をほめた意見

- あなを埋めたのは、自分だけのあなにしたかったから（9）
- 自分であなを掘ったから達成感があったと思う（3）
- 自分の心のあなをなくしたかったのかな

作品そのもののよさに気づいた意見

- この本はあなを掘ることに意味があったと思う（2）
- むずかしいけど、いろいろ考えさせる絵本だ

自分に照らし合わせて考えた意見

- ひとそれぞれ考え方がちがうなと思った
- ぼくもひろしくんのように大きなあなを掘りたい

ひろし自身の立場に立った意見

- ひろしの掘ったあなは心のあなだ（6）
- 心の中のあなを埋めるため、あなを埋めた（3）
- あなの中は、あたたかいということを学んだ
- 一人だけで静かなあなの中にいたかった
- 土の中にも生き物がいることがわかった
- ひろしは自分の心の中が見れてよかった
- 人に対する接し方が違っていた
- あなを掘って、自分の心の中がいやせたと思う
- 心がやすらぐために、あなを掘ったと思う
- もう一回あなを掘りたいからうめたのだ
- あなを掘って、空のよさがわかったと思う
- ひろしの掘ったあなは秘密の基地だ

以上が6年生の感想であるが、2年生と比較すると

作品の読みがかなり深くなっていることがわかる。

まず、ひろしがなぜあなを掘ったり埋めたりしたのかはわからないにしても、ひろしの立場に立って考えると、こうではないだろうか、という意見が多く見られた。特に、あなを掘るということに、自分なりの感想をいだいている子どもが多くいた。さらに、「あな」というのは心の「あな」という捉え方をしている子どもも多くいることがわかる。

次は、ひろしの内面について自分なりに考えて推察した感想文である。

> 私は『あな』を読んで、なぜひろしがあせをかいてまで、あなをほったんだろう。(中略) あなに入ったら、空がいつもより、広く見えた。でも、出てみると、あなは暗くて深かったのに、空がいつもよりきれいだったのかなと思った。なぜ、最後にあなを埋めてしまったのか。私は、たぶん心のあなだと思います。最後に、あなを埋めたのも、心のあなを埋めたのだと思う。あなを掘ってひろしはよかったと思う。自分の心の中が見れてよかったと思います。

③　中学校3年生の感想（26名）

ひろしの行動に疑問をいだいた意見

- なぜ、あなをあんなに深く掘ろうと思ったのか（3）
- なぜ、掘ったあなを埋めたのかわからない（2）
- ひろしのあなは、自分のいやなところなのか

ひろしの行動をほめた意見

- どんなことでもいっしょうけんめいやればいい気持ちになれるのだね

作品そのもののよさに気づいた意見

- 自分の夢を追いかける姿を描いているようだ（2）
- あなを掘ることに深い意味があると思った（2）
- ちがう世界の現実の夢をあなの世界で表現している
- あなを掘ることに意味があり、掘ったあなから見上げることに意味があり、あなを埋めることに意味があるのかなと思った
- 自分の人生を、あなを掘ることにたとえている

自分に照らし合わせて考えた意見

- 自分の力だけでやりとげる達成感を感じた（3）
- 誰に何を言われても、自分の考えを表現することが大事だと思った（3）
- 何かを一生懸命やることの大切さを感じた（2）
- 無心で突き進むことも大事だが、ちょっと一休みして視点を変えれば新しい発見があると思った
- 時には自分を振り返ることも必要だと思った
- 私も未来にむかって住みごこちのよいあなを掘ろう
- 自分の力であきらめず納得がいくまでやり続ける、そういう生き方がしたい
- 私もあせらずにゆっくりといこう
- 自分で掘ったあなは一番いいので、私も自分のあなをしっかり掘りたい
- 将来の進路や夢は、自分でがんばっていかなければならないと感じた
- 私もあなの中でかんがえる時間がほしいと思った
- あなから自分ではいあがる力がもてれば、そのあなを埋める力がもてるのだと思った

ひろし自身の立場に立った意見

- 自分で掘ったあなは、住みごこちがよさそうだ
- 自分の夢がかなったとき、つらかったことが楽しいことに変わる
- あなを掘るのはたのしいことだ
- この物語を読んで、自分のゆとりを探しあてたのかなと思った
- ひろしはあなを掘って、達成感とさびしさを感じた
- ひろしはあなを掘って何をみつけたのだろうか。何も見つけていないのなら、これからも見つけてほしい

以上が、中学3年生の感想文であるが、6年生よりも作品の読みはさらに深くなっているように思われる。中学3年生は、1月に実施したせいもあってか、自分の将来の生き方や夢と関連づけている意見が多かった。次はその代表的な感想文である。

> 自分の力でほった穴。その穴の中で座り、そして、穴から出て穴を埋める。なんだか今の私の不安定な気持ちみたいだ。私も穴の中で考える時間がほしいと思った。あせらず、ゆっくりと。その穴からはい上がる力がもてれば、その穴を埋める力がもてると思った。

この感想文からも、『あな』という本は絵本ではあるが、あらためてストーリーの奥深さを感じる。

(2)　調査からの考察

次は、各項目ごとの意見の人数を表に表したものである。(　)内は割合を示す。

内容項目	小学校2年	小学校6年	中学校3年
ひろしの行動に疑問をいだいた意見	11　(28)	29　(44)	6　(16)
ひろしの行動をほめた意見	13　(34)	13　(20)	1　(3)
作品そのもののよさに気づいた意見	4　(11)	3　(5)	8　(21)
自分に照らし合わせて考えた意見	4　(11)	2　(3)	17　(45)
ひろし自身の立場に立った意見	6　(16)	19　(28)	6　(15)

この表からもわかるように、全般的にも、ひろしの行動について、なぜなのかと疑問をいだき、自分なりの考えで作品を鑑賞していることがうかがえる。その上で、作品のよさや楽しさを見いだしたり、自分だったらどうだろうと、ひろしの身になって考えられる子

どもも、発達段階が進むにつれて増えている。小学校2年生では「ひろしの行動をほめた意見」、6年生では「ひろしの行動に疑問をいだいた意見」、中学校3年では「自分に照らし合わせて考えた意見」がそれぞれもっとも多かった。特にどの学年でも、自分自身の立場やひろしの立場で考えられる子どもが3割以上いることがわかる。また、「あな」そのものが、心のあなという捉え方をしている子どもも多く、ひろしがあなを掘って埋めることに精神的な安らぎを感じている子どもも多い。考え方・感じ方は、個々の子どもたちによってかなり差異があった。そのことが、本そのものが持っている楽しさではないだろうか。

村中李衣は『あな』という作品をビブリオセラピーに用いているが、その体験を次のように語っている。[9]

「自分という存在はちっぽけである。しかし、それは誰に比してのちっぽけさでもない。ただそこに存在するということ自体のちっぽけさを、そのまま『それでいいんだ』と引き受ける。ちっぽけだからこそ、あらゆるものにつながっていくのかもしれない。

上へ上へ、外へ外へ、ひとつの価値を積み上げていくことを強いられる毎日の中で、ひろしとともに、この『それでいいんだ』という感覚を経験することは読者である子どもたちをどれほど癒すことだろう。穴の底の『なつかしい場所』とは、癒しの場所でもあった。」

このように、子どもたちの心を癒し、また心を支えていくような本の紹介についても、学校の中で今後ますます実践していくべき課題のように考える。そのためには、「心の癒し」につながる本のブックリストが必要であることは言うまでもない。

子どもたちの人間関係が希薄になりつつある現在、相手の立場に立って、自分はどう考えどう行動すべきかということも大切なことである。作品の感想から、ひろしの行動を非難したり、物語をおもしろくないととらえる意見はほとんどなかった。むしろ、作品を読んで自分なりに考えた子どもたちが多く、この本が「心の癒し」につながる本であるということは、児童生徒の感想からも推察できる。

おわりに

子どもたちの読書離れが叫ばれている今、どのようにして子どもたちの好きな本を紹介していくかが、学校教育でも大きな課題となっている。学校の中で子どもたちに本を紹介するには、次のような場合が考えられる。

① 子どもたちの興味・関心に応じて、自分の好きな本をどんどん読めるようにする。(朝の10分間読書など)

② 教科や「総合的な学習の時間」などで、自分の課題に応じた本を紹介し、読書を推進する。(「ブックトーク」など)

③ 子どもたちの心を癒し、心の支えとなる本を紹介する。(「読み聞かせ」「ブックトーク」など)

以上のようなことが考えられるが、これまでに③については、ほとんど実施されていないのが現状である。

特に、不登校やいじめ、学級崩壊など、子どもたちの心が病んでいる実態がある以上、このような子どもたちに、「心の癒し」につながる本を紹介する場と時間の確保をしていくべきではないかと考える。

そのような時間と場が確保できれば、「読み聞かせ」「ブックトーク」などを用いて、教科、特別活動、道徳などの領域で、「心の癒し」につながる本を紹介できるので、学校の中における子どもたちの居場所づくりや、リラクゼーションを図る上でも効果的である。

2000年の「子ども読書年」を迎え、子どもたちにとっての読書の意義や果たす役割を考え直していくべきではないかと考える。子どもたちが日々学ぶ「学校」とは、「人格の陶冶」を目指すべきところであり、知的な学びの場でもある。そのような学校の本来の姿を目指した取組が求められている。

＜参考・引用文献＞

1) M.Howie."Bibliotherapy in social work",British Journal of social work,13(3) (1983)
2) 図書館問題研究会『図書館用語辞典』角川書店(1982)
3) 村中李衣『絵本を読みあうということ』ぶどう社(1997)
4) 毛利美都代「日本における読書療法の必要度調査に関する報告」図書館界、50巻4号(1998)
5) 前掲論文4)
6) 日本子どもの本研究会『どの本読もうかな？』国土社(2000)
7) 村中李衣『読書療法から読みあいへ』教育出版(1998)
8) 前掲書7)
9) 前掲書7)